人文フォーラム

26

2007.3

CONTENTS

巻頭言
ことばの道（みち）ーその先に道（どう）を見つめてー
人文学部長　桑原　俊一…… 1
Essay
ケンブリッジ大学の教育――所感
テレングト・アイトル…… 2
カナダ・ブロック大学海外研修旅行報告
カナダ・ブロック大学英語研修旅行報告
中川　かず子…… 4
学生のうちに海外に行ってみたい
1部3年　佐藤　可奈美…… 5
カナダブロック大学語学研修に参加して
2部2年　久末　眞紀子…… 6
カナダ・デイズ　1部2年　谷崎　洋介…… 8
ブロック大学研修に参加して
1部2年　岡本　拓…… 9
2006 Brock Adventure　Ian Munby……10
第14回市民公開講座報告
……11
ゼミ室紹介
1部 英米文化学科　宝利ゼミナール……12
別れのあいさつ
過去と現在との対話
安武　秀岳……14
Some Words Upon Returning
Jane Sellwood……16
大学院の窓
学業と音楽の両立
文学研究科　日本文化専攻
修士課程1年　武内　伸行……18
研究、その足跡
……20

北海学園大学人文学部

巻頭言

ことばの道（みち）
―その先に道（どう）を見つめて―

人文学部長　**桑原　俊一**

砂漠の道、オアシスの道、海の道、香料の道、塩の道、絹の道…。世界には古来さまざまな道がある。これらの道は物を運び、また諸都市を建設し、文化を伝えてきた。日本にも多様で独特の道の文化がある。広辞苑によれば「道」とは、人や車が往来するための道路から、転じて人が考えたり、行ったりすることがらの道理、仏教・儒教等の教義を意味するなどとある。人々の往来は物流を促し、文化交流をもたらした。道は文化を創成する源流のひとつである。その道を究める作法として華道、茶道、武士道などが数えあげられよう。したがって日本において道（みち）を考えることは同時に道（どう）を思考することでもある。司馬遼太郎は「街道を行く」シリーズにおいて道を読み解く文化散策の楽しみを炙り出している。いずれにせよ、道の生活文化の先にそれぞれの文化に固有な思想的結晶体があるように思う。

人文学部はことばの道に分け入り、ことばを問い質す場である。日本文化学科にしても、英米文化学科にしても多様なことばの道をめぐる学びの場だ。学部発足以来掲げられてきた指針のひとつは、グローバル化する世界において北海道から本物を発信できる人材を育成し、多様な価値観に共感できる学生を育てることである。この目標を達成する鍵はことばを道具としながら、原野を切り開いて、道を整備していくことであろう。人文学部には言語教育への道、文学への道、歴史への道、思想への道など多様な道が備えられている。これらの道はまたどこかでほかの道とつながり幾重にも十字路が形成される。この十字路でことばは生まれ、または再生し、新たな文化が創成されていく。

情報はいまや瞬時にして世界中を行き交う。高度な情報化社会である。グローバル化する社会で、多様な価値観に共感できるために、そうした社会であればこそひとつの道に固執したい。確かなものを見極め、時間をかけてことばと格闘する勇気をもとう。どんなことにも興味と好奇心を失わず、情熱と忍耐をもってことばを手繰り、自分のことばで自分の道を発見する喜びに出会おう。ことばの道（みち）に分け入り、その道の先にある、道（どう）にいたる道筋を見出したいものである。

ケンブリッジ大学の教育――所感

日本文化学科教授　テレングト・アイトル

「啓蒙の地と智恵の源泉」という校訓が象徴しているかのように、ケンブリッジ大学はフランシス・ベーコン、アイザック・ニュートン、チャールズ・ダーウィン、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン、スティーヴン・ホーキングらを輩出してきました。これらの名前だけからでもわかるように、それは「主わが光りなり」という校訓をもつオックスフォード大学が宗教・政治などの分野で多くの著名人を送り出してきたのとは微妙に違う。その対抗意識と精神は、1209年オックスフォード大学から逃れてやってきた学者たちがケンブリッジを創立した時点からすでに運命付けられていたかもしれません。現在ノーベル賞受賞者校としてケンブリッジは世界でトップ（80個）となっています。

この大学において日本と縁の深い人にはまず日本研究に多大な貢献をしたアーサー・ウェイリーがおり、ドナルド・キーンもここで洗練を受けてからこそ本格的な日本研究に旅立つことができたとのことです。しかし逆に、なぜかケンブリッジ大学を卒業した日本人が少なく、当時、漱石でさえケンブリッジ大学での勉強を断念し、ロンドンに戻り独学を決意したと言います。事実、ケンブリッジとオックスフォードは現在世界のどこの大学とも違った教育システムをもっています。その独特なシステム自体が海外留学生をスムーズに受け入れるのを困難にさせた一因になっていたと言えます。（現ケンブリッジ大学の全体学生数約17,500名、うち大学院生約7,000名、留学生約50%、教員約1,500名、日本人は毎年10名程度と言われています）。

ケンブリッジ大学の最大の特徴とは、教育・研究・試験・評価・学位授与などを行う大学・学部・研究所といった、オープンで「公的」な大学・学部側と、「寝食を共にし、共に学ぶ」という教員・研究者・学生の勉強・生活・教育と信仰（礼拝堂がかえ）の場を提供する、「閉鎖的」で、それぞれ独立自治している31のカレッジ（学寮）〈オックスフォード大学は39のカレッジ、7のホール〉側という、二重の教育システムによってなりたっていることです。全教員・研究者・学生はかならずどこかのカレッジに属し、そこを軸に寝食をし、指導・勉強をしますが、同時にまた全員が大学・学部でそれぞれの役を果たします。その基本は中世の男子のみの修道院のシステムからきているのですが、チベット・モンゴルの仏教寺院の学僧の修行システムとも非常に似ています。

学生の入学には、まずカレッジの審査・面接（各カレッジにはまたそれぞれ独自の採用システムがあります）を受け、パスした学生が、そこから始めて大学の試験を受けるようになります。カレッジに入学した学生にはディレクター・オブ・スタディーズ（カレッジフェロー兼任の学習指導監督〈1対多数・大学生を中心に指導する〉）、チューター（カレッジフェロー兼任の個人生活指導〈1対少数・大学生を中心に指導する〉）とスーパーバイザー（教員あるいはカレッジフェロー兼任の監督指導〈1対1～5・大学生と大学院生を中心に指導する〉）という指導体制が徹底され、その指導はすべてがカレッジをベースに行われます。試験・評価は大学側によって毎年公表されますが、各カレッジの業績は社会にとって互いに比較される関係におかれています。ある意味では、大学とカレッジとの

関係は、日本の国家公務員採用試験側と、受験生を送り出す大学側との関係に似ています。

各カレッジはそれぞれ独立した自治体制をとっているので、一概には言えないのですが、カレッジにおける「寝食を共にし、共に学ぶ」という指導において、カレッジ側が上記の諸指導教員・監督者たちにはワイン飲みの権利を与え、カレッジの食堂とバーは、常に学生指導・学際的ディスカッション・社交の場となっています。もちろん、活躍の主役はワインです。

学生の価値観・人格の形成、理論的思考の訓練、学問の方向・方法の決定、社交マナー・対人関係などは、ほぼこの過程において形づくられていきます。その教育の過程において、上記の「寝食を共にし、共に学ぶ」という独特な教育スタイルを除き、もう一つの決定的な指導体制があります。それは、つまり最も効率的で、外側ばかりか、内側からもよく見えない、しかも誰も真似できない特殊な、いわばスーパーバイザーによる一対一の「密室裏」に行われる個人指導・教育です。文科系の学生は、具体的に二年以上、平均毎週一回 4 ～ 5 頁のエッセーをスーパーバイザーに提出してみてもらい、書いたものについて議論するという読み書きと思考方法の育成に力を入れています。よく言われるオックスブリッジ両大学の卒業生は筆が立つという秘訣が凡そそこにあると言ってよいでしょう。そういった個人的指導は、人格の形成から、レポート・論文及び文体のすみずみまで影響を与えるとのことですが、しかし、もし学生が嫌ならスーパーバイザーを幾らでも変えられ、納得ができるまで公平に交替が許されます。私の個人的なインタビューで判明したことですが、ケンブリッジ・ボーイが成長し、一人前の社会人か研究者となってから、最も感謝し、恩恵を受けたというのは、ほぼ特定か複数のスーパーバイザーとなっています。というのも、そのスーパーバイザーらは「憎まれる」前に、事前に調整・交替され、その結果、学生たちはほぼ最良のスーパーバイザーに恵まれているといってよいからです。もう一つの特徴としていうならば、ケンブリッジは伝統的に全学に数学を必修科目としてきた伝統がありました。現在、変化し、その代わりに基礎教養科目を強化した教育を行っています。私のかかわる文学・歴史・哲学・人類学の専門の教育科目をみてみると、大学の 3 年間の教育読書リストからでもわかるように、学生たちは驚くほどの大量な基礎教養知識を習得し、その試験をパスしなければ進級できません。そして最も印象的なのは、学生の互いの競争意識は高いが、同時に助け合う精神も義務と同等に見なされ、それは他の大学にはあまりみられないことです。学生の友達関係は、カレッジを中心にしているので、学部と専門と国籍と年齢がまったく違う人が多く、お互いにさまざまな違ったサークルに複合的に繋がっています。しかもカレッジは彼らにとってお互いに助け合うファミリー・ホームとなっており、卒業生は生涯を通じていつでもカレッジに帰って泊まったり食事をしたりすることができるようになっています（カレッジのライフ・メンバーとは、中世の修道士にとっていうまでもなく、孤独な現代人にとっても、名実共にファミリー・メンバーということを意味しているようです）。

13 世紀から近代まで、全イギリスから代々にわたって多くの青年がここに送られ、ここで教育を受けてきました。その学生たちが巣立ったか、それとも大学を永眠の地としたか、各カレッジのチャペル（礼拝堂）と周辺の遺跡が、その歴史をまざまざと物語っています。近代になってから、ケンブリッジには全欧米から多くの学徒が集まるようになり、現在では全世界から来るようになっています。しかしその基本はあまり変わりません。つまりここから巣立っていくか、ここを永眠の地とするか、そのすべてがこの大学のどこかにさまざまな形で克明に記されています。そういう意味で、この大学の神と神に恵まれた智恵を象徴する各カレッジのチャペルから、図書館・博物館・記念物まで、また学徒の永眠の地とする教会墓地・共同墓地から、さまざまな彫像・記念碑・絵画・写真まで、そのすべてがさまざまな形で知を生きる人々の生を全うしているようです。

カナダ・ブロック大学 海外研修旅行報告

カナダ・ブロック大学英語研修旅行報告

引率教員（日本文化学科）　**中川　かず子**

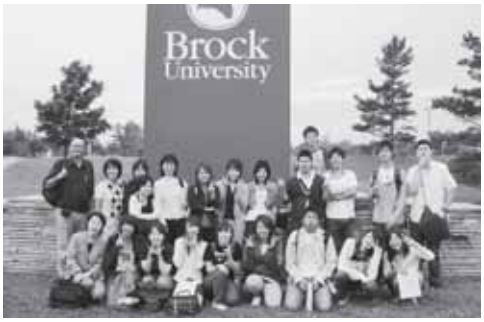
今年で 6 回目を迎えたカナダ・ブロック大学研修旅行は 2006 年 9 月 3 日から 9 月 24 日までの 3 週間の日程で実施された。英米文化学生 19 名（うち 2 部社会人学生が 2 名）、日本文化学生 1 名の計 20 名、それに引率教員の Munby 先生と中川の一行 22 名はテロに対する警戒の厳しい成田空港でのチェックを無事に通り、カナダトロント市のピアソン国際空港に着陸した。予想通り、空港の Luggage Claim で時間がかかり、我々のバスは夜 8 時半に漸く St. Catharines にあるブロック大学英語研修所前に到着、そこで Home-stay 家族と大学スタッフに温かく迎えられカナダでの初日が始まった。

学生達の参加したブロック大学 IELP（留学生向け英語プログラム）には、中国、韓国、台湾、タイ、ロシア、イラン、ヨルダン、メキシコ、ブラジルなど 10 カ国以上からの語学留学生に仲間入りをさせてもらう形で三週間、クラスに合流した。幸い、日本人留学生はほとんどいなかったため、我々は日本人学生の「代表」として講師の先生方、ほかの留学生から注目された。時には「日本人は中国への侵攻をどう思うか」など中国系学生から歴史観を尋ねられることもあったようだが、概ね、友好的な目で迎えられた。また、日本人を含む 20 数名の多文化、多国籍の英語講師による楽しく、熱意あるクラスも学生達には好評だった。修了式の午前中、あちこちで本学学生とのお別れ会や写真撮影が行われ、クラスメートから慕われた様子がうかがえた。

学生達は放課後、ほぼ毎日課外活動に参加した。スポーツ、映画鑑賞のほか、ワイン工場・ぶどう園、Welland 閘門運河（Lock 3）見学、湖畔公園でのバーベキューパーティ、デキュー（DeCew）滝へのハイキングなど St. Catharines 市内の自然を満喫できた。そして、この地域ならではの壮大な観光名所であるナイアガラの滝も存分に楽しめた。さらに、19 世紀のオンタリオ州都だった Niagara-On-The-Lake やカナダ最大の都市であるトロントへの小旅行も貴重な体験となった。このようなサービス精神の豊かな特別課外プログラムに常に付き添ってお世話してくれた大学の活動コーディネータの方々の心配りと親切な態度には頭の下がる思いであった。

三週間の研修を終え、大学関係者からもホームステイ家族からも本学学生に対する賞賛の声を聞き、学生達の満足そうな表情を見るにつけ、本研修への高い信頼と評価が揺るぎないものと感じられた。また来年度も是非、

See you at the Brock University ！



学生のうちに海外に行ってみたい

1部3年　英米文化学科　**佐藤　可奈美**

「学生のうちに海外にいってみたい」。これが私のブロック大学海外研修に参加しようと決めた当初の理由でした。しかし、この研修旅行は私に期待以上の貴重な体験をもたらしてくれました。ブロック大学での授業は、ライティング、スピーキング、リスニング、リーディング、グラマーの5つで、基礎的なレベルのクラスでした。しかし、前置詞 under と underneath の違いなど知らなかった事や、新しい単語なども続々出てきて、大変勉強になりました。私のクラスには、中国人、韓国人、台湾人、メキシコ人がいて、とてもフレンドリーな人たちばかりだったので、すぐに打ち解けられました。彼らは日本人の私を見ると、よく日本のアニメや音楽の話をしてきましたが、アニメにいたっては彼らのほうが断然詳しく、しばしば解らないことがありました。カナダの文化だけではなく、中国、韓国、台湾、メキシコの文化や考え方などもよく学ぶことができたと思います。最後の日にみんなが寄せ書きを書いてくれてとても感動しました。“Hope you have a beautiful future. Hope that China and Japan will be peaceful and friendly forever” や “Your singing is pretty good! You will become more and more beautiful!!” など素敵なメッセージばかりで、これを見たとき「帰りたくない!」と思ったことを覚えています。また、ホストファミリーには大変お世話になり、彼らからカナダの文化や習慣を学びました。仕事で忙しい中、スーパーや隣町まで買い物に連れて行ってくれたりと、家族のように接してもらい、カナダの生活を体験できました。たった3週間という短い時間でしたが、一番充実できた貴重な3週間でした。このプログラムに参加できて本当によかったです。最後に私を後押ししてくれた全ての人にありがとうと言いたいです。

カナダブロック大学語学研修に参加して

2部2年　英米文化学科　**久末　眞紀子**

昨年の年末年始の一カ月間、私は登山のため南極にいた。アメリカとカナダからのクライミングメンバーと過ごし、ネイティブ同士が話している内容を理解できなかった。勉強しているのは英語だろうか。学ぶ道は遠く、なんとも心細くなった。

いくつかの国を、単語を並べた会話で旅をしてきた私は、言葉がわからなくても食べて、寝て、移動できることを知った。しかし友だちができると、いろんなことを話したくなる。単語とボディランゲージの会話には限界があり、もっと英語が話せたら楽しいだろうと、仕事と登山ばかりの生活を軌道修正して大学の英文科に入学した。一年目は、世界の七大陸登頂を目指していたので登山活動に忙しく、英語はさっぱり上達せず、留学して勉強したいと思うようになった。そして、留学がどのようなものなのかを知るために、カナダ・ブロック大学の語学研修に参加した。

大学では、初日にテストをしてクラス分けをする。一番下のクラスだったので、無理がなく授業そのものを楽しむことができた。むしろ、どのように教えるのか教師の指導方法に興味を持った。クラスは16名で、なんと12カ国からの生徒が集まった。メキシコ、コロンビア、台湾、中国、韓国、トルコ、リビア、サウジアラビア、ヨルダン、ベラルーシ（ロシア共和国）、スイス、そして日本である。教師が話す英語、イタリア語、フランス語を合わせると15カ国語を教室にいながら聞けるのである。それぞれの母語の響きはアクセントやイントネーションが違い、さながら音楽を聴くようである。

さて、文法のリーの授業は〈Did you get new word ?〉から始まる。当てられた生徒は前に出てボードに単語を書き言葉で説明する。辞書は英英を使わないと意味が違うと言い引かせない。〈I am a dictionary !　Ask to me !〉とリーが言う。その単語を使った文章を作り同意語を書き出す。〈Everybody likes grammar !〉と言いながら構文の説明を始める。彼女はわざと反対の例を持ち出し、「リーはスマート」とかイギリス人の夫を「おかしな人種」とユーモアを混ぜ、生徒の注意をそらさない。皆が笑いながら文句を言うと〈Teacher is always right !〉と威厳を持って言い放つ。

スピーキングとリスニングはイタリア系カナダ人の陽気なリナだった。彼女はフランス人の母を持ち、フランスに留学した経験から語学を学ぶアドバイスをしてくれた。留学した一年目は同郷のカナダ人と一緒だったのでさっぱりフランス語を覚えず、二年目に英語を話すことを止めたら、母が驚くほど発音が上達したと話してくれた。クラスの中だけで英語を勉強していてはダメだといい、母語を話す生徒が隣り合わ

せに座ると引き離した。そして、昼食時も英語を使いなさいとアドバイスした。彼女の授業は楽しかった。初日に、二人一組になり、ひとりが廊下に貼りだした短い文章を読み教室の相手に伝え、相手はそれを聴き取って書くゲームをした。台湾のエンジェルは〈the〉を「たぁ」と発音し、メキシコのクラゥディォは「らぁ」と巻き舌になる。スペルを聞き返しても、A.B.C...の発音そのものが違うので、なかなか文章にすることが出来ない。〈What's ?〉〈Ah ?〉と、だんだん声高になり、書き終ると喉がカラカラになった。

リーディングはシャーノン、若くスリムな先生で生徒に一番人気があった。彼女の授業は、聞く、読む、書く、話す、のすべての要素が入る。たとえば、映画がテーマの場合は、グループを作り、ジャンル別にリストアップし、どの映画がどのように面白かったかを話し合い、それを文章にする。毎日、新しい構文を覚え、それを使って文を作る練習をする。図書館で本の選び方を説明し、本を開いて1ページに知らない単語が10個あったらもっとやさしいものを選ぶようにとアドバイスをした。毎週一冊の本を読み、要約を書くことが課題だった。

どの教師も教科書だけにたよることなしに、オリジナルの教材を工夫していた。雑誌の切り抜きを使って説明させるとか、NHKテレビの「パックン英検」もどきとか、あきないアクティブな授業だった。そのなかで「どうして英語を勉強したいのか」話すことがあり、興味深かった。多くの意見が、英語は国際的に使えるからと言うものだった。親に勧められたからとか、イントネーションがセクシーだからという人もいた。社会人は、よりよい仕事に就くためであった。

このクラスの日本人は、私ひとりだった。私以外は半年から一年間の留学生で、社会人は自分で費用を賄っていた。台湾のエンジェルはOL、メキシコのクラゥデオは学生、トルコの国語教師、サウジアラビアのドクター、スイスの建築家、コロンビアの土木技師と異文化をミックスしたクラスは、職業も年齢も違いとてもおもしろかった。それぞれの文化や食べ物、お国事情など、短い期間にたくさんの異文化に接することが出来た。

そして、日本の若い研修生たちとナイヤガラ観光を楽しみ、すばらしいユーモアのセンスを持つ愉快なマンビー先生やスマートな中川教授と夏休みを過ごすことができたのは嬉しく、凝縮されたエキサイティングな時間を持つことが出来たと思う。

カナダ・デイズ

1部2年　英米文化学科　**谷崎　洋介**

14時間のフライトからようやく解放されて、セントキャサリンズに到着して3週間お世話になる家族と対面しました。そこで待ち構えていたのは、英語のみという現実。自己紹介をして、プレゼントを渡したり、家の中を案内してもらったり全てが英語で繰り広げられ、当然の事だとわかっていながらも、どこか戸惑っている自分がいました。ホームステイは今回が3回目なので、気持ちに余裕があると思っていましたが、その気持ちは家に到着してすぐに消えてしまいました。というのも、今回お世話になった家庭には、自分の他に3人もの留学生がいたのです。中国、韓国、トルコと、普段では絶対に関わることがない人達と3週間を共に生活をするのかと思い、新たな出会いに対する期待と不安で胸がいっぱいでした。

面白いことに、ブロック大学の授業でも同じような状況に置かれました。クラスの大半が中国人で、その中に韓国人やロシア人、メキシコ人など、世界の各地から学生が集まり授業が展開され、その中に数人の日本人（学園生）が混じり、3週間一緒に勉強していました。授業はもちろん英語で、ディスカッションをしたりエッセイを書いたり、生の英語に触れながら勉強していましたが、休み時間になるとそこは中国語のオンパレード。どこもかしこも中国語が飛び交い、先生達が英語を話せと怒鳴っている姿がとても印象的でした。実際自分達も日本語で話していましたが……。

放課後になるとみんなでナイアガラの滝に行ったり、映画を見たり、ボウリングに行ったりと、色々な行事が用意されていて、朝から晩まで楽しんでいました。中には学園生だけの行事もあり、トロントに行ったりワイナリーに行ったり、気がつけば2年生も3年生も分け隔てなくとってもいい関係になっていました。

3週間という短い間のカナダでの生活。たくさんの人、異なった文化に触れて過ごした3週間。全てがドキドキであっという間に過ぎたカナダでの日々は、今でも鮮明に思い出されます。

ブロック大学研修に参加して

1部2年　英米文化学科　**岡本　拓**

今回、初めての海外遠征を思い切り楽しんで来ました。カナダの地で、英語漬けの生活をし、カナダの文化に触れ、いろんな人に出会ったことは、私にとって非常に貴重な経験となりました。

カナダに到着し、ホストマザーに温かく迎えられ、私のカナダでの生活が始まりました。カナダでの生活は、何もかもが新鮮で刺激的でした。祝日にはほとんどのお店が閉まっていたり、夕飯にグリーピースが大量に出てきたりと驚くことばかりでした。その中で、文化の違いに戸惑いや苛立ちを感じることもありましたが、今思うと、それもいい経験だったなと思います。

ホストマザーはとても温かい方でした。一緒に生活していく中で、私は、カナダの文化やマナーを教えてもらいました。私の誕生日の9月

6日には、サプライズ・パーティーを開いてくれました。ほぼ初対面のホストマザーのお孫さんが張り切って飾りつけをしてくれ、ホストマザーもいつもより豪華な料理を作ってくれました。この日は、カナダの人たちの温かさを実感しました。

ブロック大学では、1日5時間にもわたって、韓国人や中国人と一緒に英語の授業を受けました。韓国人も中国人も文法など細かいことは気にせず、積極的に英語を話していました。そのため、授業はとても活発で、5時間はあっという間に過ぎていきました。最初のうちは、なかなか思うように英語を話せませんでしたが、しだいに授業にも慣れ、積極的に英語を話せるようになったと思います。中国人や韓国人ともよく話すようになり、仲良くなっていきました。

そして、授業が終わった後や休日には、毎日のようにいろいろなアクティビティーがあり、いろいろなところへ行きました。ナイアガラの滝も、ナイアガラ・オン・ザ・レイクの町並みも、運河も、みんな美しかったです。

この3週間は、自分の英語力の向上にとても役立ったと思います。英語を通じて、いろいろな人と交流できるということは、とてもすばらしいことだと思いました。3週間、本当に楽しかったです。

2006 Brock Adventure

Ian Munby

I acted as chaperone with Professor Nakagawa for a group of 20 second, third, and fourth year students from the Faculty of Humanities, Hokkai Gakuen University, Toyohira, Sapporo for a study trip to Brock University, St. Catharines, Ontario, Canada for three weeks in September 2006.

After a long flight, we arrived in the evening of the same day at Toronto airport, boarded another bus and arrived at Brock University ninety minutes later. The homestay families of our students picked them up and took them to their homes. The two chaperones stayed at The Four Points Sheraton Hotel.

The first day, Monday, September 4th, was a national holiday in Canada which gave everybody a chance to rest. On Tuesday, September 5th, we attended orientation sessions at the school. Drinks, pizza and other snacks were provided for all the students. On Wednesday, September 6th, all 180 students on the program, including the 20 students from Hokkai, took a two-hour placement test and then boarded buses for a trip to Niagara Falls. This trip was the first of a total of 6 trips for which transportation and entrance tickets were provided free for our students. Three of the trips were for Hokkai students only, and the other three were open to students from the whole school. The trips included i) Niagara Falls, ii) Port Dalhousie Lakeside Park, iii) Fort George and Niagara-on-the-lake, iv) bowling, v) a visit to a local winery, and vi) a full day trip to Toronto.

There were also five 50-minute English classes every day. I was very impressed with the quality of the activities organized by the Brock IELP activities coordinators, especially Ms. Jackie Angi-Dobos who worked tirelessly to make our trip a special and memorable one. She even organized birthday parties and provided presents for three of our students who had birthdays during the trip. I was also impressed with the level of professionalism displayed by the Dr. Glen Irons, the Brock IELP Director, Ms. Jackie Sanders, Brock IELP Assistant Director, and Ms. Stephanie Marandola, the homestay coordinator. They all worked hard to make sure the trip was a great success and indeed I believe we all agree that it was.

（日本文化学科・講師）

第 14 回市民公開講座報告

平成 18 年度の市民公開講座は、 9 月 30 日（土）から 11 月 4 日（土）まで開催されました。テーマと講師は次の通りです。

第 1 回	語り出されることば	栗原　豪彦
第 2 回	ことばと沈黙	土屋　　博
第 3 回	民族と言語	岩崎まさみ
第 4 回	英語と現代世界	米坂スザンヌ
第 5 回	コミュニケーションとことば	中川かず子

今年度の公開講座は、テーマを「ことばを生かす、ことばが生きる」と設定し、講師それぞれの専門領域から「ことば」をめぐり現に生じている諸問題に立ち向かう新鮮な切り口が提示されました。全 5 回の講演の要点は次の通りです。

第 1 回：意思や感情を伝え思考の手段となる言語はわたしたちの社会的認知的活動を支配しています。ことばによるコミュニケーションは多種多様な要素がからみあう複雑な脳の営みです。語りだされる乏しいの量の記号列から豊かなメッセージが伝わったり、誤解が生じたりするしくみを、話し手と聞き手の関係、場面、盛り込まれる情報量や質、想定や推論などを手がかりとして、身近なことばや広告などを通して考えてみます。

第 2 回：ことばが生きて働くのは、会話や演説のように、音声を媒介とする場合のみではありません。読書のように、文字を媒介とする情報伝達も、ことばの重要な機能です。さらに、文字も用いず、身振りだけで何かを伝えること、あえてことばを発しないことも、広い意味でのことばの働きと考えよいのでないでしょうか。ここでは、それらの相互関係を考えてみたいと思います。

第 3 回：言語とは「音」や「文字」などの記号であり、それらの記号に様々な意味を付加することにより、記号の送り手と受けての間にコミュニケーションが成立する。この単純とも見えるメカニズムに、人々は「言語は民族の命」といわれるほどの無限大の意味を込めてきた。本講座では失いつつある言語を再生し、次世代へ継承しようとするいくつかの事例を検証し、民族と言語の関わりについて考える。

第 4 回：国際共通語になった英語、「グローバル・イングリッシュ」の役割と問題点を取り上げます。英語圏（英国・米国等）と非英語圏（日本等）以外での共通語・公用語（シンガポール、インド等）としての多様な英語、「Englishes」のさまざまな問題。「ネイティブ・スピーカ」という表現の意味合い、道具としての英語の使用者と英語文化の必要性、英語の世界共通語化の影響により消滅していく少数派言語の問題など。

第 5 回：「日本人は世界有数の話し下手」というレッテルを貼られることがあります。「言わぬが花」「沈黙は金」「一を聞いて十を知る」「以心伝心」など、日本人同士では口数が少ないほうがむしろ美徳とされますが、日本人の「察しの文化」がいつでもどこでも通用するとは限りません。様々な考え、価値観の交差する現代社会で、また国際化が現実的に広がっている現在、日本人がことばとコミュニケーションの問題とどう向き合っていくべきかを考えていきます。

今年の受講登録者は 38 名（定員 50 名）。毎回活発な質疑応答がなされ、成功裡に講座を終えることができました。

ゼミ室紹介

1部 英米文化学科　宝利ゼミナール

WORK HARD AND PLAY HARD

（翻訳「ヨクマナビ　ヨクアソベ」）

木下　貴仁「EU 憲法問題」

「大学生活を一言で表すとすれば、『YOSAKOI』でした。本当に『授業＜練習』でした。『YOSAKOI』での経験は本当にためになりました。もし『YOSAKOI』を一度でもやりたいと思った、そこのあなた！！チャレンジしてみてください。今後も北海学園のヨサコイ・チームである『粋』をどうぞよろしくお願いします。ぼくの一番関心のある『良く学ぶ』ことについてコメントしなくてすみません。」（スタンドの声「マナブよりケイコというわけか」）

酒井　菜津子「日本と欧州の外国人労働者問題」

「我がゼミはとてもアットホームなゼミです。それは大黒柱である宝利先生がいるから。欧州を中心とした国際関係論とメディア論が専門ですが、テーマは自由！とことん探究心を深め、『良く学び』ましょう！手厚いサポートがついていますよ！」

真田　洋之「欧州に見る世界遺産」

「ラクすぎず、タイヘンすぎないゼミ。そのため、他の勉強、バイト、就活、『良く遊ぶ』は自分の思うまま♪、とまでは行きません。ゼミは EU（欧州連合）問題が中心ですが、EU についての知識が乏しい僕（笑）は欧州の世界遺産について調べています。先生も豊富な知識を持っているので、このゼミを選んでよかったと思います。」

東海林　史子「欧州とアフリカの貿易・経済関係」

「美味しいゼミ。別にいつも皆がガトー・ショコラを食べながら『良く学んで』いる訳ではない。各々の意見が相手の味を引き立たせ、高め合う。そんな贅沢でリッチな空間が口いっぱいに広がるのが、このゼミである。」（スタンドの声「なんと格調高いことか！」）

イラスト：酒井菜津子

杉野　裕幸「スウェーデン社会保障の行方」

「宝利先生は知識が豊かで、優しく、たまに悪ノリします（笑）。授業はすごく楽しいのですが、就職ガイダンスなどと重なってゼミに出られないことがあります。内定もらったら先生の家で飲み会しましょ♪」（スタンドの声「家のふかふかジュウタンにワインをこぼされると困るので、ススキノで内定祝い飲み会しましょ♪」）

前田　奈々「ヨーロッパのホロコースト」

「私の誇りとしているものは、大学で所属している硬式野球部です。野球部に専念しすぎて『良く学ばない』（笑）怠慢な私を、宝利先生に理解していただき、本当に感謝しています。これからゼミの仲間ともっと仲良くなって、もっと『良く学び、良く遊んで』ゼミを満喫したいと思います。」

松田　敏幸「スイス産業の秘密」

「宝利ゼミのテーマは非常に自由度が高く、すごく良いです。ゼミ生はいろいろなテーマに取り組んでいます。例えば、欧州の移民問題、EU 憲法の行方、世界遺産に指定された欧州の遺跡、など多種多様です。そんなゼミなので、僕自身たくさんのことを『良く学ぶ』ことができて楽しいです。１、２年生の皆さん、宝利ゼミはお勧めですよ。」（スタンドの声「今年の３年ゼミはなし。君たちが最後のゼミ生だよ」）

吉田　共宏「欧州連合の経済動向」

「このゼミは楽しいゼミです。『良く遊び、良く学べ』がゼミのモットーです（スタンドの声「逆だよ」）。ぼくはアメフト部員として『良く走り』、昨秋の北海道学生アメフト秋季選手権大会で“宿敵”北大と同率１位となり、優勝できました。授業にあまり参加できませんでしたが、アメフトに集中し、結果を出せたのは『良く学ばない』で『良く走った』からだと思います。」

小川　慶太「ヨーロッパのビールを極める」（仮題）

「宝利ゼミは先生が面白いのはもちろん、自分の興味のあるテーマを楽しんで『良く学べる』ことです。ちなみに、ぼくは通風気味ですが、ビールを通して日本とヨーロッパのビール文化の真髄を極めようと決意しています。」

※名簿順。氏名の後は研究テーマ

過去と現在との対話

英米文化学科教授　**安武　秀岳**

『過去と現在』と言えば、世界で最も有名な英国の歴史学雑誌の名前である。この雑誌の命名者は恐らく、ひとは常に「現在」に生きて歴史を書いて来たという、当然ではあるが、つい忘れがちになる事実に注意を喚起し、歴史家自身の自己相対化の必要を説いたものと思われる。

2002年4月名古屋から北海道の本学に席を移してほぼ5年が経過しようとしている。この間、アメリカ史研究者たちは多くの予期せざる変化に直面した。その最大の直接的契機は前年の9月11日のニューヨーク市世界貿易センタービルの爆破事件であった。当時、私はこの事件がどのような意味を持つことになるかなど考えてもみなかった。ただ漠然と起るべくして起こったと直感していた。

米国は第2次世界大戦後、ほぼ一貫して、世界の警察官の役割を演じて来た。ヴェトナム戦争の失敗という挫折はあったものの、ソ連崩壊後の湾岸戦争の圧倒的勝利と父ジョージ・ブッシュの細心にして、周到な戦後処理によってパクス・アメリカーナは完全に復活し、アメリカ人と彼らの指導者たちはすっかり自信を取戻したかのように思われていた。クリントン政権下でのアメリカ経済の再生は、バブル崩壊後の不況に苦しんでいた日本人にとっては驚嘆すべきことであった。しかし1990年代ユーゴ内戦介入などにみられる米国の軍事超大国としての国際紛争処理の仕方に疑念を表明する識者も少なからずいた。

このような状況の中で起こった爆破事件に対する日本人の反応は、かなり多様で流動的だったように記憶している。概して一般の庶民はこの事件をクールに受け止めていたようである。対岸の火事として、アニメ感覚でテレビの画面に釘付けされた知識人も多かった。政治学者や正論家の中には、このような反応を憂慮し、日本人はいまや断固として米国政府支持の態度を表明すべきであると論壇を鼓舞する人も現れた。友人の国際法学者はアメリカ史家の私に、これでアメリカ人は自信を喪失するのではないかと問いかけた。これは、国際法に関わるかなり長期的な射程距離を持った問いであったように思われる。今にして思えば、彼の質問の意図が奈辺にあったかを問い返さなかったのを残念に思っている。やがてニューヨーク市民を含めて、全米のアメリカ人が愛国心から驚異的団結を示しているとの報道が連日、繰り返された。北海学園大学英米文化学科に入学してくる学生の中にも、このような報道に感動してアメリカ賛美者になった人もいた。

しかし日本の多くのアメリカ史家たちはこのような日米の世相に危惧の念を抱き始めていた。共産主義反対のスローガンの下に国民的団結を示した冷戦時代の米国で、冷戦政策に抵抗する多くの知識人の言論や労働組合指導者の活動が弾圧され、その後米国は泥沼の「反共」ヴェトナム戦争に突入して行った。歴史家たちはこの現代史の悲劇を真剣に考え続けてきたからである。

彼らの危惧は間もなく現実となって現れた。テロとの戦いの名の下にアフガン戦争が始まった。日本の論壇ではこの戦争に公然と反対した知識人は少なかったし、今でも決して多くはない。そんな中で財団の基金で運営されているアメリカ研究振興会の会報の第一面にアフガン戦争批判論説が掲載された。この戦争はアメリカ

の良き伝統に反する非合理的な、理由なき戦争であるというのがその論旨であった。「財団」運営には縁遠く、この財団の内状を知らない者にとっては、これは鮮烈な驚きであった。この論説の執筆者はこの財団の理事でもあったアメリカ学会会長の故阿部斉放送大学教授であった。

その後アメリカはイラク戦争に突入し、多くのアメリカ学会の第一線の研究者たちは、学会がイラク戦争反対の声明を出すべしとして、署名簿を理事会に提出した。さすがに理事会はこの提案には応じなかった。あらゆる思想的立場の人々の広場である学会が、会としての特定の政治的意見を表明することは適切でないというのが理事会の立場であった。私もこの立場を支持する者であるが、同時に少なくともこの理事たちの中の何人かは個人としてブッシュ大統領の中東政策に対して手厳しく批判してきた人々であったし、私は彼らの批判が大半の学会員に支持されていたと判断している。実際、この数年の学会の懇親会では、出席してスピーチをした日米の多くの研究者たちがイラク戦争に対する不快感を表明したし、そこではイラク戦争支持の意見など一度も聞いたことがない。

このような時期に、私はこの北海学園大学で自らのアメリカ史研究を総括することになったのである。この総括の過程で、第一次世界大戦以後の度重なるアメリカ人の戦争を彼らの内面で支えて来た「アメリカ民主主義」とは何だったのかを再考した。これはかつてヴェトナム戦争中に書き、その後すっかり棚上げにしていた「伝統としてのアメリカ民主主議―ジャクソン時代史に関する研究ノート」のテーマでもあった。近年、社会史や経済史の論文を書いていた私が、突如として本学の紀要に政治史論文を書くようになったのは、自己の歴史研究は最終的には政治史で総括すべきであるという、この十数年来強まってきた内発的な信念によるものであるが、同時にそれは私にとってのこの数年間の「過去と現在との対話」の結果でもある。退職を前にして最後に執筆している人文学部の紀要論文の題名は「合衆国憲法体制の展開―奴隷主国家の出現」である。この論文では、建国から南北戦争までの歴史を、従来の如き民主主義の発展の歴史としてではなく、奴隷主国家の展開過程として再構成する。その論旨は、「アメリカ民主主義」出現を指導したのは、南部奴隷主階級であったという点を指摘することにある。多分これは、現代のアメリカ民主主義者には受け入れ難いことかも知れない。

Some Words Upon Returning

Jane Sellwood

I would like to thank Hokkai Gakuen University for giving me the opportunity to experience the culture and the people not only of Sapporo but also of many places throughout Japan.

In particular, I will remember with fondness my students here at HGU. During the past ten years of my teaching in the Faculty of Humanities, my students have afforded me moments of extreme gratification. Colleagues here in Japan have asked me how Japanese students compare to Canadian students. Any differences, I have replied, are cultural and linguistic. Classroom dynamics in either country are my challenge, and thankfully, my reward. Although students have been the best part, there have been other memorable aspects of my ten years teaching at Hokkai Gakuen University and eleven years living in Japan.

Books have always been my passion, and one of my greatest joys is reading. Thus, my ten-year sojourn at Hokkai Gakuen University, with a generous library account as part of my yearly contracts, has allowed me to indulge both my passion and my joy. Future generations of students and faculty members will, I hope, share in the wealth of literature that it is my delightful privilege to relinquish to the competent hands of HGU library staff. My legacy of titles ordered for HGU *toshokan* under the auspices of research includes fiction and non-fiction on a variety of subjects from several countries, including Japan.

However, all these books are in the English language because, other than possessing a reading knowledge of hiragana, katakana and a few simple kanji, I am illiterate in the Japanese language. My excuse is the sheer volume of kanji needed to read even the simplest newspaper—about two thousand characters. Please accept my humblest apologies for my lack of diligence when it came to kanji during my time here.

Writing, I find, is less enjoyable than reading. After the considerable angst involved in research, organization, rough drafts and editing, enjoyment finally may be had with publication. HGU's generous breaks between teaching have given me the uninterrupted time and solitude to write and publish articles in my academic areas of Canadian literature and literature by women.

In addition, my academic experience in Japan was boosted considerably by my involvement with the Japanese Association of Canadian Studies and the Canadian Literary Society of Japan. Both organizations kindly offered me the opportunity to present at annual conferences and to publish in their journals. Moreover, these associations fostered connections with Canadianists in other countries. My participation as a JACS member led to acquaintance with an Australian colleague in Canadian studies who kindly asked me to

serve on the editorial board of the University of Sydney journal, Australian Canadian Studies, a position I have maintained for eight years and continue to regard as a welcome duty indeed. I will remain grateful to Hokkai Gakuen University for allowing me to attend conferences and present papers in areas related to my academic qualifications.

My eleven years in Japan have enabled me to travel within the country. Perhaps the most heartfelt experience of my Japan sojourn, my recent visit to Nagasaki occurred recently, a few days after my sixty-second birthday. I left the annual Japanese Association of Language Teachers (JALT) conference at Kokura/Kita Kyushu a day early to spend Sunday afternoon in Nagasaki walking between the atomic bomb epicenter, the atomic bomb memorial, and the atomic bomb museum. It is part of the Japanese historical record and within the personal memories of many Japanese people that Fat Boy created Nagasaki's epicenter and subsequent incineration. Ironically, as I learned, the planned target was Kokura, which I had left to visit Nagasaki. Here was I, having followed a route that led to the accidental target— "a break in the clouds" — sixty-two years earlier on August 11, 1945, three days after Little Man's black rain had pierced the atmosphere over Hiroshima. Positioned at Nagasaki's epicenter, the memorial is the colour of ashes, an angular oblong of steel sleek as a gun barrel, the very image of technological dehumanization. This Sunday in Nagasaki will remain with me as perhaps the most significant memory of my sojourn in Japan.

When I am a "returnee" in Canada, many memories of Japan will come flooding back, I am sure. Even now nostalgia seems to tinge my image of the magnificent old cherry tree in Nakajima Koen's traditional Japanese garden. I, too, have anticipated *ohanami* and the lacy fullness of *sakura* in Hokkaido's late spring. My appreciation of Japanese culture also has been helped by my first year in Nara, where the famous Shin-Yakushiji Temple shelters a shrine to Kannon where I have, at certain times, sought solace. I will long remember, too, lighting a candle for the soul of my son at the Maria-Kannon temple in Nagasaki.

These are only a few memories of my Japanese sojourn for which I thank Hokkai Gakuen University. To my wonderful students and helpful colleagues, I also extend my gratitude. How fortunate I have been to have lived, taught and learned here in your beautiful country.

Sayonara.

Jane Sellwood, Ph.D.

大学院の窓

学業と音楽の両立

文学研究科 日本文化専攻 修士課程１年　**武内　伸行**

私は現在、大学院に在籍し、「浄土真宗本願寺派の北海道開教」を勉強しています。その一方で趣味の一つである音楽活動をしています。ロック・ポップス・ジャズ・クラシック……ジャンルという枠で区切るのでなく、すべては音楽であると考え、様々な活動をしています。

その活動の一つがビッグバンドです。大学２年の途中までは Free Formless Jazz Orchestra で活動していましたが、諸事情で辞めざるをえなくなりました。しかし、ビッグバンドには少人数のバンドや吹奏楽とはまた違ったおもしろさがあり、続けたいという思いがありました。そこで、高校生の時からお世話になっている手稲の楽器店がきっかけで新たに参加したのが手稲の社会人ビッグバンド、Joyful Heart Orchestra Teine(J-HOT) です。

このバンドでは学生バンドでは味わうことのできないおもしろさがあります。最大 52 歳もある年齢の幅、ジャズだけでなく、歌謡曲・演歌・ラテンなどジャンルが多岐に渡っていること、ダンスパーティのバックバンドなどの演奏活動、そして、社会人バンドならではの味があります。また、このバンドでプロの方々と一緒に演奏させていただく機会がたくさんあり、多くのことを学ばせていただいています。

この J-HOT の昨年最大のイベントが「韓国演奏」でした。韓国在住のメンバーと一緒に韓国で演奏したいとの強い想いから実現するに至りました。

社会人バンドの抱える一番の問題は練習時間の確保です。全員の日程をあわせることがなかなかできず、例年行っていた定期演奏会、ダンスパーティー、その他営業などをせず、１年間韓国での演奏に向けて少ない練習時間をフルに使いました。韓国で恥ずかしい演奏はしたくない、アマチュア・プロ関係なく、舞台に上がる以上は聴きに来ていただいたお客さんを満足させたいとの想いがメンバーの精神的な支えでした。

不安と期待を抱きつつ、いざ韓国へ。２泊３日の韓国でしたが、ほとんど観光する時間もなく、２日目に予定していたライブハウスへ。オーナーは韓国を代表するジャズピアニストであり、韓国ジャズ界の草分け的存在である申官雄氏。韓国にはビッグバンドジャズはプロ・アマ含め数えるほどしかないようで、物珍しさもあってか、決して大きな会場ではありませんでしたが、奥の方には立ち見もでるほどでした。ピアノの状態や、リハーサルの時間が少ないなどの悪条件の中の演奏でしたが、お客さんのノリがよく、打ち合わせにないパフォーマンスや、予定外にアンコール曲が増えるなどの大盛況でした。舞台と客席が近いせいもあってか、演奏者とお客さん、会場が一体となって楽しめた、そんな２時間だったのではないかと思います。申官雄氏や、飛び入りで参加してくださった韓国で活躍する日本人ジャズギタリストの畑秀司氏といった韓国で現役のプロの方々にも好

評をいただき、韓国演奏は成功に終わりました。

年が明け、バンドは韓国での演奏をふまえ、新たな目標を掲げて活動をしています。私自身も昨年の反省をふまえて目標を達成できるようにしなければならないと思っています。学業と音楽の両立。決して簡単なことではありませんが、己の意志で決めたことですから、納得のいくよう歩んでいきたいと思います。

新聞　2006年（平成18年）11月5日（日曜日）　北海道

札幌のアマ・ジャズバンド「J・HOT」

ソウルも乗せた♪

海外初公演

【ソウル4日近藤浩】札幌市手稲区を中心に活動するアマチュアのビッグバンドジャズのグループが四日夜、初の海外遠征としてソウルで公演を実現、乗りのいいスイングがソウルのジャズファンたちの心をつかんだ。

グレン・ミラーなどの名曲をソウルのステージで披露したメンバーたち（近藤浩撮影）

韓国の大御所「うまい」

「ジョイフルハートオーケストラ手稲」（略称J・HOT）で、手稲区内で楽器店を営む代表の関谷圭司さん(56)が呼びかけて十四年前に結成。会員は二十代の学生から七十代までと幅広い。ソウル公演は、メンバーの末原久史さん(35)がソウル日本人学校教員としてソウルに赴任したことが縁で実現した。

公演には会員二十人のうち、十七人が参加。ソウルの芸術の街「弘益大」かいわいのジャズライブハウスで、カウント・ベイシーやグレン・ミラーの名曲をはじめ、「釜山港に帰れ」などアンコール二曲を含む二十曲を熱演。会場には現地の日本人も大勢詰め掛け、立ち見も出る盛況だった。

ライブハウスのオーナーで韓国ジャズ界の大御所、申官雄さん(56)は「アマチュアでこんなにうまいとは驚いた。プロも目覚めさせられます」と絶賛。代表の関谷さんは「お客さんのおかげで気持ちが乗った。ソウルに来たかいがありました」と話していた。

北海道新聞
2006年（平成18年）11月5日（日曜日）

■学会・研究発表

米坂スザンヌ　"Ts's Use of Ss' L1: Introducing the FIFU Checklist" 11月、第32回全国語学教育学会（JALT）国際大会、北九州

土屋　　博　国際ワークショップ「韓日宗教文化交流―研究の現状と課題―」（総評）、12月9日、魅力ある大学院教育イニシアティブ（「人間の統合的理解のための教育的拠点2006)、北海道大学

安酸　敏眞　"Lessing as a Proponent of Modern Dialectical Theism" The 122th MLA (Modern Language Association) Annual Convention. Philadelphia, U.S.A., December 30, 2006.（レッシング没後225年を記念するレッシング学会のセッション"Religion in Lessing's Life and Thought: A Session in the Lessingjahr 1781/2006" のパネリストとして上記のテーマで発題講演を行い、その後パネル・ディスカッションに臨んだ。）

大濵　徹也　「開拓植民と宗教」9月19日、日本近代仏教史研究会夏期セミナー

常見　信代　「中世のスコットランド法」10月、日本ケルト学会第26回大会、女子美術大学

岩崎まさみ　「先住民族と開発事業に伴う影響評価の手法について」8月5日、共同研究会「開発と人権」、国立民族学博物館

大石　和久　「函館と映画」10月28日、北海道芸術学会第8回例会、北海道立函館美術館

中川かず子　「韓国における日本語学習者の日本語・日本文化に対する意識」8月6日、2006年度日本語教育国際研究大会（International Conference on Japanese Language Education)、共同研究発表（代表者)、コロンビア大学、ニューヨーク

テレングト・アイトル　「比較文学からみる東西及び日中蒙の文学の起源と日本文学の教育現場での可能性」国際日本文化研究センター、第8回日本在住外国人シンポジウム「コミュニケーションを考える」2007年1月12日、13日（'A Comparative Literature Perspective on the Origins of Eastern and Western Literatures and Sino-Japanese-Mongolian Literature, and the Possibilities for Japanese Literature in Current Education' International Research Center for Japanese Studies Eighth Annual Symposium for Foreign Scholars Resident in Japan 'Rethinking "Communication"' 12-13. 1. 2007）

Lorne Kirkwold.　"Using the web and word processors to teach students strategic competence," Presentation at JALT (Japan Association for Language Teaching) Hokkaido, Hokkai-Gakuen University (September 2006). Presentation at JALT, Kitakyushu International Conference Center, Kokura, Kitakyushu (November 2006).

■著作・論文

追塩　千尋　「『今昔物語集』本朝部の神について」、速水侑編『日本社会における仏と神』所収、9月、吉川弘文館◇「凝然の宗教活動について」11月、『人文論集』35号、北海学園大学人文学会

小野寺靜子　「『さぶ』考―万葉集を中心に―」11月、『人文論集』35号、北海学園大学人文学会

大濵　徹也　「企業アーカイブズの責務と課題」、『企業史料協議会ニューズレター　別冊』2006年9月、企業史料協議会、1－15頁◇「キリスト者にみる日本への目―矢内原忠雄を場として―」、『明治聖徳記念學會紀要』復刊等43号2006年11月、明治聖徳記念学会、62－71頁◇『社会科　現代問われている世界』、「はじめに　現在社会科教育が問われること―国家を相対化する目とは―」（3－14頁)、「おわりに」（249－252頁）10月、同成社（編著）◇『20世紀の歴史家たち(5)日本編　続』、「服部之総」(173－187頁)、「おわりに―戦争と革命の間に生きる」（303－309頁)、刀水書房（編著）

栗原　豪彦　「言語学の対象をめぐる二分法再考」11月、『人文論集』35号、北海学園大学人文学会

土屋　　博　「宗教論の曲り角」6月30日、『宗教研究』348号、日本宗教学会

常見　信代　「ケルト人」、「スコット人／スコットランド人」、「運命の石」、「古き同盟」、「アーブロウスの宣言」、「タータン」、「服装の変遷」など大・中項目15項目、『スコットランド文化事典』、原書房、2006年

岩崎まさみ　「サケをめぐる混沌」2006年3月、『環北太平洋の環境と文化』北海道立北方民族

博物館編、北海道立北方民族博物館（共著）
中川かず子　「韓国における日本語学習者の日本と日本文化に対する意識(1)―大学の日本語専攻生・非専攻生に対する調査から」11月、『人文論集』第35号、北海学園大学人文学会

■講演
土屋　　博　「ことばと沈黙」10月7日、第14回市民公開講座『ことばを生かす、ことばが生きる』、北海学園大学人文学部、北海学園大学教育会館
栗原　豪彦　「語り出されることば」9月、第14回市民公開講座『ことばを生かす、ことばが生きる』、北海学園大学人文学部、北海学園大学教育会館
濱(浜)　忠雄　「ハイチの現在、過去、未来」7月、「ハイチの会」創立20周年記念講演会、名古屋国際センター
中川かず子　「コミュニケーションとことば」11月、第14回市民公開講座『ことばを生かす、ことばが生きる』、北海学園大学人文学部、北海学園大学教育会館
大濵　徹也　「日本の公文書館」7月3日、公文書保存管理講習会、独立行政法人国立公文書館◇「開拓地の生活と祈り」7月12日、第41回北海道神社庁空知支部神社関係者大会◇「日本の公文書館」9月4日　公文書館等職員研修会、独立行政法人国立公文書館◇「公文書概論」9月25日、公文書専門職員養成課程、独立行政法人国立公文書館◇「開拓地の生活と祈り」9月16日、北海学園大学オープンキャンパス◇「家庭からの発信―法の和を―」10月29日、平成18年次壮年結集大会、立正佼成会高崎教会◇「地域における記憶の共有化―私たちのコミュニティーを形成するために―」12月12日、2006年度文書等保存利用機関団体等職員研修会、北海道立文書館

■評論・エッセイ
栗原　豪彦　「古典的図書館とネット図書館」7月、『図書館だより』Vol.28、No.2、北海学園大学付属図書館
土屋　　博　「求道の時」7月25日、『国際宗教研究所ニュースレター』、財団法人・国際宗教研究所◇「現代社会の根底にある『宗教的なもの』」9月1日、『学報』第67号、北海学園大学
岩崎まさみ　「多様化する日本社会」『季刊北方圏』2006.Vol.136◇「多民族社会日本のチャレンジ」『季刊北方圏』2006.Vol.137
大石和久　「映画における北海道表象――その隠喩性について」11月、『日本映画学会会報』第6号
大濵　徹也「時代をきりひらく器として―公文書館の必要性と可能性―」、『西日本新聞』2006年11月11日

■研究費受領
土屋　　博　平成16年度科学研究費補助金（基盤研究B(1)）研究分担者（継続）、「カルト問題と社会秩序：公共性の構築にかかわる国際比較研究」（代表者：櫻井義秀北海道大学大学院教授）◇平成18年度北海学園大学学術研究助成、「宗教集団における教典の機能」
岩崎まさみ　科学研究費補助金・基盤研究（A）「先住民による海洋資源の流通と管理」（代表者：岸上伸啓）、2003年－2006年◇基盤研究B「植民地化以後の土地および環境利用の変化―その現状への影響アセスメント手法構築」（代表者：渡辺公三）

■翻訳
安酸　敏眞　F.W.グラーフ『神々の再来――近現代文化における宗教――』（抄訳）『人文論集』7月、第34号、北海学園大学人文学会◇カール・バルト『十九世紀のプロテスタント神学　中――第一部　前史（下）――』（カール・バルト著作集12）新教出版社、9月（佐藤司郎・戸口日出夫・酒井修と共訳。「6. レッシング」と「8. ヘルダー」の翻訳と解説を担当。）

■その他
追塩　千尋　「中世西大寺流関係文献目録稿（補遺及び続編）」7月、『人文論集』34号、北海学園大学人文学会
中川かず子　カナダ・ブロック大学研修旅行引率、9月3日〜9月24日◇全北海道学生競技ダンス連盟主催「第35回全東北・北海道学生競技ダンス大会」大会会長、10月、北海道大学第一体育館◇「日本人の発想と日本語」、出前講義（札幌北陵高校）、11月

表紙：秦檍丸（村上島之允）「カシケクロクチ」・「玫瑰花」：『蝦夷島奇觀』1800年7月自序、墨筆画、折本、28.5×20.5cm、北駕文庫所蔵

『蝦夷島奇觀』は1798（寛政10）年～1806（文化3）年まで幕史・普請役御雇として蝦夷地の地理・風俗・産物などを調査した村上島之允（1760［宝暦10］年～1808［文化5］年）がアイヌ民俗の習俗を忠実に描き、解説ともに後世に伝える有名な民俗資料である。

画中の説明文には、こうある。「カシケクロクチ山鼠なり全體五道あり。寫生の如し。事物紺珠曰石虎に似たり。一人云、清文鑑曰、華錦鼠ともいへり。」

・「カシケクロクチ」:「カシイキリクス」また「カシクルクル」ともいう。場所に依て名異なる。シマリス。（『事物紺珠』：巻28、獣部獣類。『御製増訂清文鑑』：巻31）。
・「玫瑰花」：ハマナス。実をマウという。マウタは不詳。『蝦夷草木譜』に「マウ……当地のバラ類、奥州にては浜ナス……」とみえ、また『東蝦夷物産志』には「マウチクニ……玫瑰也」とある。

（北駕文庫　吉田千萬　記）

編集後記

本号ではこの3月をもって退職されるお二人の先生にお別れのエッセイを寄せていただいた。それぞれ本学や日本での思い出を感慨深く語ってくださったことに心から感謝申し上げるとともに、今後ともますますお健やかに活躍されるよう祈念したい。また恒例のカナダ・ブロック大学での語学研修（2006年9月）に参加した学生4人の体験記からは、生々しい異文化体験の興奮と意義が率直に伝わってくるようである。（栗原豪彦）

今号には、大学院の窓で、学外で生き生きとした活動を行っている院生にその報告を書いてもらいました。今後もそのような学生には、活動報告を書いてもらおうと考えております。人文フォーラムの執筆者にふさわしい学生がおりましたら、自薦他薦問いません、ご紹介ください。（大石和久）

前号の25号、17頁、「人文学部第10期生 卒業論文・卒業研究題目一覧」に以下の誤りがありました。ここに訂正し、ご迷惑をおかけした関係者のみなさまにお詫びを申し上げます。
（誤）村山　舞
（正）村上　舞

人文フォーラム26：2007年3月2日発行　編集人：栗原　豪彦、大石　和久　発行人：桑原　俊一
発行：北海学園大学人文学部(札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161)　印刷：㈱アイワード